

『一般文芸新聞』における

最初期のカント哲学の普及活動

田 端 信 廣

はじめに——最初期の批判哲学批評——

一七八一年五月、『純粹理性批判』初版の公刊当初、この新たな哲学のマニフェストが「同著のいかんともしがたい曖昧さと難解さにほとんどだれもが苦情を言うという運命」⁽¹⁾に見舞われたことは、よく知られている。同書の最初の解説書の著者 J・シユルツェ (Johann Schulze [auch Schulz] [1739-1805]) が述べているように、超越論哲学という領野には「未だいかなる足跡もなく、開示された展望はどれもまったく親しみのない、思いがけないものであり、また考え方も用語法もすべてひっくりかえり、とにかく新奇で不慣れなものばかり」であったのだから、「そのような著作が大衆受けするわけはなく、だれにも理解できるものではない」のも当然であった⁽²⁾。

読書界一般はもちろん、哲学の専門家仲間さえ、その著を前にして途方にくれていた。カントがあてにしていた

M・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn 1729-1786) や J・N・テーテンス (Johann Nikolaus Tetens 1736-1807) は、「批判」を理解するにはもはや歳をとりすぎていた^④。前者はかの「著作をわきに押し退け」、後者は哲学の領域から引退したまま一言も語らなかつた。カントのもつとも忠実な弟子、M・ヘルツ (Marcus Herz 1747-1803) はといえは、依然として前批判期の「就職論文」に専心したままで、「批判」に対してはこれまた反応が鈍かつた。

「批判」の出版者 J・F・ハルトクノッフ (Johann Friedrich Hartknoch 1740-1789) の「あらかじめの配慮によつて」前以て逐次そのゲラ刷りを入手していた J・G・ハーマン (Johann Georg Hamann 1730-1788) が、この「超越論的無駄話」は「結局のところ、些細なことにこだわり、空虚な美辞麗句を並べ立てるだけにおわっているようにわたしには思われる」^⑤と若き友人に書き送つたのは、まだ「批判」が公刊される以前ことである。この手紙の受信者 J・G・ヘルダー (Johann Gottfried Herder 1744-1803) は、一七八一年の暮れにハーマンにこう報告している。「カントに向かつていますが、先へ進めません。イエーナのダーノヴィウスはこの本を読むのに一年かかつたと、講義中に言いました。だがわたしには二、三年はかかるでしょう」^⑥。かつてカントの優秀な学生であり、今やワイマールでプロテスタントの地方総監督の地位にある彼は、その三カ月後にも「カントの批判はわたしにはとても食える代物ではありません。ほとんど読まないままになるでしょう」^⑦と告白している。「批判」は公刊当初、まさに「だれも開封することのできない封印された書のごとく」^⑧扱われていたと言える。

かくして「批判」に対して、学術的世界、読書界は当初——カントが述べているように——「沈黙をもつて敬意を表わ」した^⑨というより、むしろ「困惑に満ちた沈黙」で応えたというのが実情であろう。当時大部分の大都市、多くの宮廷都市、帝国都市で出されていた「学芸報知 (Gelehrte Anzeigen)」の類や批評誌の反響もカントがひそか

に期待していたものからは程遠かった。まず、一七八一年中は、學術誌上で「批判」に言及した批評は二本しか現われなかった。しかも、これらはともに本格的な書評というより、むしろ「批判」の論述主題を順次簡潔に記述しただけの紹介記事であった⁹⁾。

著作の内実にかかわる論評が現われるのは、翌年一月のことである。もともと權威あつた學術新聞のひとつ『ゲッチンゲン学芸報知 (Göttinger gelehrte Anzeigen)』一月十九日付けの「付録」に、「批判」の匿名批評が掲載されたのである。しかし、啓蒙主義的な通俗哲学の二人の代表的人物、Ch・ガルヴェ (Christian Garve 1742-1798) と J・G・H・フェーダー (Johann Georg Heinrich Feder 1740-1821) による極めて異例な仕方の合作であつた¹⁰⁾この「悪名高い」批評は、「批判」を広く世に知らせる契機を与えたとはいへ、カントの超越論哲学の根本的誤解に立脚していた。ここでカントの観念論はバークリーの観念論と変わるところなしとされたこと¹¹⁾に対して、カントが翌年春の『プロレゴメナ』の付録で憤然として、ゲッチンゲン書評と書評者を批判・弾劾したことは周知のとおりである。新しい教育理念によつて名望高かつた新設大学（一七三七年創設）をもつゲッチンゲンは、当時ベルリンと並ぶドイツ啓蒙主義の中心地であつた。フェーダーをその中心とする、ゲッチンゲン大学を拠点としたくないこれと密接な関係にあつた通俗哲学者たちは、——ライプニッツ・ヴォルフ哲学との折衷という形態を採つていたとはいへ——どちらかと言へばロッキの経験主義をその思想的背景としていた¹²⁾。こうして批判哲学への最初の攻撃は、ロッキ的な経験主義に与する陣営から放たれたのであり、この陣営からの攻撃はその後に戦線に拡大し、一七八七年——一七八八年にピークに達することになる¹³⁾。

さてゲッチンゲン書評以後も数年間、「第一批判」はそれに相応しい評価を得ることはなかつた。この間の『プロ

レゴメナ』の公刊もこうした事態の改善にほとんど寄与しなかった。これについても、たいていは論評抜き短い論述主題の紹介記事がいくつか現われただけであった(たとえば、注(9)の⑥⑦⑧⑩⑪)。いわば「プロレゴメナを前にして読者は、批判を前にしたときとほとんど同じように尻込み」⁴⁴⁾していた。一七八四年になると、ようやく各種の批評誌にカントの立場についての言及、批評、書評も増えてくるが、これらの中にはすくなくならず反カント的なものも含まれていた⁴⁵⁾。

こうして「批判」はその公刊以降あしかけ四年にわたり、つまり八〇年代前半を通して無理解ないし無視の眼差しにさらされ続けていたと言える。状況に転換の兆しが認められるのは、一七八五年に入ってからであり、その転換はザクセン・ワイマール公国の大学都市イエーナを拠点に始まる。まず八五年初頭に、イエーナで『一般文芸新聞』(Allgemeine Literatur-Zeitung)が創刊される。すでに前批判期のカントの諸論文に精通していた、イエーナ大学の詩学および修辞学教授 Ch・G・シュッツ (Christian Gottfried Schütz, 1742-1832) を編集長に据えたこの書評紙は当初から——ベルリンの『ドイツ百科叢書』や『ゲッテンゲン学芸報知』に対抗して——親カント的立場を打ちだし、カント哲学の普及と各方面からの反カントキャンペーンへの反撃の拠点として、およびその初期のカント学派形成のための機関誌として、決定的な役割を果たしていくことになる。同紙の創刊に前後して、イエーナ大学では多くの開明派神学者の属していた神学部やシュッツの属する哲学部でカントの新しい哲学の検討、受容の過程が促進され、批判哲学に言及した「講義目録」が次々と告示されつつあった⁴⁶⁾。

さて本稿は以下において、この十八世紀後半のドイツにおけるもつとも注目すべき定期刊行物である『一般文芸新聞』の創刊の経緯とイエーナ大学での初期のカント哲学受容の実態を紹介し、次いで、同紙の創刊後二年間に

「哲学」欄に掲載されたカント批評を検討することを通して、同紙がカント批判哲学の受容と普及にいかにか決定的な役割を果たしたかを明らかにしようとするものである。

一 『一般文芸新聞』の創刊

1 『一般文芸新聞』発起人会

一七八四年九月、『ドイツ・メルクル』の「告知欄」に次のような書き出しで始まる記事が載る。「われわれは、格別の要請に応じて、以下のように『一般文芸新聞』の掲載を早める。同紙はイエーナのヨハン・ミカエル・マウケ社で、メディアン全紙四つ折り判で特別に印刷され、ドイツ中の郵便局で入手可能となるはずである。たしかに、——だが一目見てもそう言うであろうが——われわれもこの事業は非常に大規模なものになると思っている。しかしこの事業も力をひとつに結集した発起人たちにとって、手に余るものではない。発起人たちの下には（われわれが信頼に足りると考えている）我が国でもっとも学識豊かな最高の頭脳が集まっており、それに編集の任を務めるイエーナ大学のシュッツ教授の高名は、われわれの期待が裏切られることなく実現されるであろうという信頼感をわれわれに呼び起こす¹⁾。大仕事を前にしていささか気負いも感じられるこの「告示」に述べられている「われわれ」「発起人たち」とは、メルクル誌の主筆者 Ch・M・ヴィーラント (Christoph Martin Wieland 1773-1813) と同誌の共同編集者 F・J・ベルトゥーフ (Friedrich Justin Bertuch 1747-1822) をしてシュッツである。実際この事業は「非常に大規模なもの」になった。それは、この四つ折り紙四頁立て（縦二段組）——一七八六年以降は、同じく四面立て

ながら八頁——の書評専門紙が、およそありとあらゆる学問領域を対象に^⑧、Zeitung という名称にふさわしく日曜を除く毎日、通年発行されたという事実ひとつからも推察されるであろう。このような学問と芸術の全領域を網羅するような^⑨通年の書評紙の構想を最初に——一七八四年の春か、あるいはそれ以前に——抱いたのは、ベルトゥーフであった。彼はドイツ学芸界と出版界の現状を鑑み、「学芸便覧の体裁と「書評の」完全な不偏不党性および通年性とを結合したような領域網羅的な雑誌」^⑩の必要性を痛感し、その構想をヴィーラントに打ち明けた。ヴィーラントはおおいに関心を示したものの、その実現可能性についてはかなり懐疑的であった。ベルトゥーフは「いまや大衆は包括的な批評新聞をどれほど熱心に求めているかという証拠」を示し、そして「一ボーゲンにつき最高二十ターレルの原稿料を見積もっても」^⑪「総額二百カロリンの出資金さえ集まればこの事業が実現可能であることを証明してみた」^⑫。この企画は、当時大きな変動期にあった出版—読書界の状況を考慮すれば、たしかに時機に適つたものであった。経済的、社会的発展に基づく「読書する大衆」の著しい増大が進行していた。これと相互作用を及ぼしながら、出版市場の飛躍的拡大が進行していた^⑬。「君主や大臣から街のまき割り人や村の居酒屋の農夫まで、化粧室の婦人から台所の掃除婦までが、皆雑誌を読んでいる」^⑭という状況が生まれつつある時に、「読者大衆が……注目すべき学芸上の商品全体の出来具合について、信頼に足りる遺漏なき完全な報告をいち早く得る」^⑮ことができるのをうたい文句にした書評紙の出現はまさにタイムリーであった。つまり、この日刊書評紙は、ちょうど二十年前にF・ニコライが着手したかの野心的企て、すなわち全ドイツの新刊書籍を網羅した通年の書評の提供という企てを、より徹底した形態で、しかも新しい精神を旗印に掲げて遂行しようとするのである。

このような領域、すなわち人知の商品化Vという仕事におけるベルトゥーフの才能はすでに定評があった。ワイマ

『一般文芸新聞』における初期のカント哲学の普及活動

ールのギムナジウムからイエーナの神学部に進んだ後、一時地方の家庭教師の地位にあった彼が健康上の理由から故郷に戻ったのは、一七七三年——ヴィーラントがエアフルト大学から、宮廷顧問官兼公子傳育官として赴任した翌年——のことである。その後カール・アウグストの秘書兼財産管理人となり、ワイマールにさまざまな事業（製紙工場、造花工場など）を起こして成功を収めた後、彼はまず一七八〇年に『スベイン・ポルトガル文学雑誌』を創刊し^⑧、大評判を得る。続いて『ドイツ・メルクル』の共同編集者（一七八二年九月から八六年七月まで）として、発行部数の落ち込んでいた同誌^⑨のてこ入れに力を発揮する。だがなによりも彼のセンスと才能がいかに発揮されたのは『奢侈・モード雑誌 (Journal des Luxus und der Mode)』（一七八六年一月創刊）の刊行と成功であった。「アクセサリーや宝石を含む男女向けファッション、家具、骨董品、食器から乗り物類」さらに「庭園と別荘のプラン、その他特に外国の目新しい品物全般」を扱うこの新種の人情報カタログ雑誌^⑩は、「[T]Vよりももっとしつかりと、ワイマールの町と公国の住民たちの諸活動と融合していた」^⑪。「ワイマール」とイエーナの「文化を市場で通用する商品に変える」という点でのこうしたベルトウーフの抜群のセンスと才能が、『一般文芸新聞』創刊に際しても発揮されたのである。

さてベルトウーフとヴィーラントは基本的プランを申し合わせた後、シュッツを編集者に口説き落とした^⑫。かくして創刊直後からセンセーションを巻きおこし、すぐさま全ドイツのみならずヨーロッパ各地でも高い評判を得ることになる、——そして批判哲学の普及とカント学派の形成に重大な役割を担うことになる——この新たな書評紙は、ワイマールの長老と卓越した文化産業の担い手そして批判哲学の意義をいち早く洞察した哲学者の合作として誕生した。一七八四年の夏前には書評紙の理念、基本構想もほぼ固まり、以降シュッツは書評に際しての「基本的規範」の

作成と第一級の能力をもった常連寄稿者集団の獲得活動を精力的に展開し、ベルトウーフはもっぱら出版と販売面の責任者としての努力を傾注した。かなり反響を呼んだかの「告示」の後、十月にはマウケ社との間に「印刷協約」が締結され、十二月には「A.L.Z. 発起人会 (Die Societät der Unternehmer der A.L.Z.)」の名で、同紙創刊号にも再録される「予告 (Vorbericht)」が再び全国に発送されることになる。

2 「書評の基準」をめぐる発刊直前のトラブル

「予告」に即して『一般文芸新聞』の掲げた理念と目的を確認する前に、発刊直前に発起人たちの間に起こった或るトラブルに触れておかねばならない。それは、一面では極めて人間臭い心情の軋轢を示すエピソードであるが、しかし単にそれにとどまらず、同紙が目標とした批評活動の原則と水準、そして編集者シュッツのこれに賭ける意気込みを伺わせるエピソードでもある。

年明け早々からの発刊準備も万端整った一七八四年十二月の初め、シュッツからラインホルトに一通の書状が届く。「拝啓。貴兄から届けられたふたつの書評を楽しく拝読しました」という書き出しで始まるこの書簡⁸⁾は、ラインホルトの担当とされていた数本の書評のうちとりあえず完成した二本分⁹⁾に関する返書である。

返書はまず、「A.L.Z. の基本構想」を実現していくために、編集者たる自分にはそれなりの権限が委託されていると断ったうえで、「基本構想」の要求する批評上の原則をわざわざこう指示している。「(a) できの良い著作には、単に褒めことばと小言を並べ立てるだけでなく、その裏付けをも明示すること。(b) 歴史的事実や哲学的所見などになんらかの新しい事柄を含んでいるような著書の書評に際しては、その事柄の要点を簡潔に提示すること。(c) できの悪い著

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

作の場合でも、その欠点をしかるべきことよつて特徴づけること。続いて、寄稿予定者と「発起人会」との間にすでに結ばれている「契約」および書評起草に際する「基準条項」をラインホルトが守っていない点に苦言を呈し、両書評の内容、形式を「契約に基づいて」修正、補強するよう、かなり細かい指示を与えている。その指示は、『説教集』の場合は、「匿名で出版されたが」書籍見本市のカタログにはアイベルが著者として印刷されている点を注記してください。著作の表題は、わたしが直したように、略記しなければならぬし、ページ数は絶対落としてはならず、著作の店頭販売価格も、——判つていれば——記入しなければなりません」などという点にまで及んでいる。

このような事細かな指示にもましてラインホルトの神経を逆撫でしたのは、次のような文言である。「貴兄の書評はみな、自然にほとぼしるような流麗な文体に溢れています。『一般文芸新聞』がただ雄弁な本物の批評だけを含んでいてよいならば、それ以上のことは望むべくもありません。しかし本紙は、学芸の全体に関心を寄せ、それを有益に利用せんとする人々の便覧でもなければなりません。ですからいつも可能なかぎり著作から汲み取れる実利的なことを配慮しなければなりません。／当の著作を最後まで読み通しておかねばならないのはもちろんのことです。これに反して『ドイツ・メルクル』で通例となっているような書評をものにするだけなら、手の早い有能な人なら、著作のほぼ四分の一も読む必要がないことも多いでしょうが」^脚。

これに対してラインホルトはすぐさま、書評の若干の箇所は改善、補強したいとシュッツに返答したものの、同時に、彼のいかにも教師然とした指示に対しては、自分は「これまでもう二年も批評活動をやってきた」経験があり、自分の書評が「突き返される」などという屈辱は甘受しがたいと応酬する。また、シュッツの懇懃無礼な言い回しに逐一反論し、「どんなくずの作品でも最後の一行まで読むべき」だとか、ましてや著作の「店頭販売価格」まで申告

せよというのは、度を越していると付け加える^㉔。事態を深刻にしたのは、ラインホルトのワイマール移住以降の数か月間、公私両面に渡ってこのお気にいりの若者の「庇護者」を任じてきたヴィーラント^㉕の反応であった。シュッツの書簡を見たヴィーラントはさっそくベルトウーフにこうねじ込んだ。「一般文芸新聞の編集者殿は、わたしの名において起草され、かつわたしが完全に裁可し傑作と認めた、ラインホルトによるデュヴァル作品集の書評を、一般文芸新聞には使えないものならず、指定された書評原則に適合していないものとして送り返すのが適当と判断されました。『……』デュヴァルの作品集についても、カトリックの説教集についても、わたしは非常に満足を覚えていることを、あなたにもわかるように口頭ではつきり伝えた」はずだ。そしてシュッツの要求している杓子定規な「書評の原則」を非難するにとどまらず、彼は、自分がすでに起草し編集部に提出していた書評原稿もまた「編集者殿の原則にそぐわない」であろうからと、その返還を要求するに及んだ^㉖。

シュッツとベルトウーフはひそかに対応策を協議し、両者合意のうえ十二月八日付けの長い書簡がシュッツからラインホルトに再び届けられる^㉗。彼は、ヴィーラントの存在を意識しながら、ラインホルトがこだわっている前の手紙の表現の真意を詳しく説明する。だが、編集者たる自分が、すでに確定されている「企画」や「書評原則」にしたがって書評者にあれこれ原稿の修正や改善を求めるのは当然である点は譲らない。君は「もう二年も書評活動をしてきた」と言うが、その十倍つまり「二十年も書評に携わってきたベテランの寄稿者」もいるのであり、「彼らにわたしが、企画にしたがってあれこれ変更を指示しても、まずいことになった例しなどない」^㉘。「寄稿者に加わっている、ドイツでも第一級の哲学者ふたりは、企画上必要ならどんな修正を加えていただいても結構です、とわたしに書いてきています」。「しかもその一人は、自分が送った書評が不適であると判定されたり、却下された場合には原稿料を放

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

「棄するとまで書いています」⁸⁷⁾。

しかしこの書簡もかえってヴィーラントを一層憤慨させる結果に終わった⁸⁸⁾。そしてヴィーラントは十二月十一日、出資金はそのままにして『一般文芸新聞』の仕事一切から手を引くことを最終通告することになる。こうして同紙は大々的な事前の広告活動にもかかわらず、創刊を待たずしていったんは挫折の危機に見舞われたのである。しかし他の二人は思案のあげく、ヴィーラント抜きで事業を継続することを決心する。皮肉なことに、『一般文芸新聞』は「告示」宣伝文に唄われた「発起人たちの統一した力」とは裏腹のかたちで発刊されたのである。

3 「予告」の基本方針あるいはキャッチ・フレーズ

さて創刊号にも再録された「予告」に即して、この書評紙の掲げた理念と基本方針を確認しておこう。

「予告」はまず、ニコライの批評誌の場合と同じように「ドイツ内外のもっとも立派な学者たちが寄稿者として」同紙を「支えている」という点を繰り返し強調している。発起人たちは、「それぞれの活動分野で博識という点では文句なく第一級の折紙をつけられる」学者や「有名な文筆家」が、「有能な裁判官」として最新刊の批評、判定を読者に提供するすることを「改めて請け合」っている⁸⁹⁾。実際、すでに八四年の夏にはシュッツがカントに報告しているように、「すべての部門でもっとも優れた学者五十名」程が同紙に「参集し」ていた⁹⁰⁾、その二年後には百二十名の寄稿者集団が形成されることになる⁹¹⁾。

続いて「予告」は、同紙の基本方針を読者にアツピールする四つのキャッチ・フレーズを掲げる。まず、「公平無私たること (Unparteilichkeit)」が我が文芸新聞の第一の原則である⁹²⁾。この原則を維持するために「著者が自分の書

いたものを自ら書評したり、友人同士が仲間ばめをする」ようなことは排除され、「ある種の党派や宗派、特定の団体が常に正しいとか、逆に間違っているとか判定されたり、特定の著者が詳しい理由も挙げないままいつも称賛されたり、逆にけなされたりする」ことは許容されない⁴⁶。この第一原則から直接「帰結する」のが、批評・判定が「信頼に足りるものである (Zuverlässigkeit)」とどう点である。これは、いかなる権威や名声に対しても「率直かつ大胆な精神」で批評がなされることによって保証される。批評に際して混入しがちな個人的配慮を避けるために、書評者がだれであるかは著者には伏せられる。これらの点は、「学術雑誌での党派的な観点からの賞賛や非難について従来からしばしば出されてきた苦情」を配慮しつつ⁴⁷、同紙が真に学問的評価・批判に値する厳格な批評を目指すことを表明したものである。しかし、「公平無私たること」を掲げた『一般文芸新聞』がその批評活動において実際に不偏不党でありえたのか——そもそもそのようなことが可能であるのか——について言えば、現実の事態はむしろ逆であったと言えよう。というのも「十八世紀後半には、新たに登場しつつあった思想の諸潮流が各々それぞれのために生み出された固有の機関誌を通して、哲学論争に介入しては効果をあげることが可能であるという事態が出現していたのであり」⁴⁸、そのような「理論の実用的利用」による「学派形成」の典型的事例⁴⁹が、『一般文芸新聞』を通したカント批判哲学の普及と発展であったからである。

第三のキャッチ・フレーズは、批評の対象領域の「網羅的包括性 (Allgemeinheit)」である。同紙は「ドイツ語の著作に関しては、毎年のライプツィヒ書籍見本市のカタログに記載されるすべての著作と文献」をもれなく書評の対象とすることを唱う。また「外国の文献に関しては、ドイツ人に関心あるすべての作品が、外国の雑誌からの転用ではなく同紙の批評者たち自身によって評定される」⁵⁰。こうして書評対象となる内外の新刊の総数を、編集者たちは

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

年間四千点と見込んでゐる。最後に挙げられるのが、他のいかなる雑誌にも勝る「著作の情報提供の迅速性 (Pünktlichkeit der Bücheranzeigen)」である。週六回発行の同紙がイエーナとその周辺の予約講読者には、郵便できちんと毎日配達され、遠隔地の予約講読者も一週間ごと(郵便で)か、ひと月ごとに(書店経由で)入手可能であったこと(例)、これに対して当時まで主導的書評誌であった『ドイツ百科叢書』が一年間にほぼ十八回しか発行されなかったことを勘案すれば、たしかにこの点での同紙の優位性は際立っていた。このような文字通り学芸の全領域を網羅した書評専門紙が日刊、四頁立てで刊行され、しかも当初こそ六百部の予約講読で出発したものの、一七八七年までには二千部、一七九五年までには二千四百部にその販売部数を伸ばしたという事実は、現代から見ても驚異的なことである。最後に、同紙が初めからドイツのみならずヨーロッパ各地で読まれることを期待して「ラテン文字」で印刷される旨が印されている点も付け加えておかねばならない。

とくにイタリックで印刷されたこれら四つのキャッチ・フレーズが、『一般文芸新聞』の理念と目的を分かりやすくいかたちで提示するとともに、他の学術雑誌、批評誌に対する同紙の優位を際立たせるのに功を奏したこと、これが同紙の営業面での成功をもたらした大きな要因であったことは想像に難くない。しかし、同紙が実際の編集方針においてどのようなスタンスを取ることになるのか、とくにライプニッツ・ヴォルフ哲学の改良とロック的経験論の交差する後期ドイツ啓蒙主義の思想的諸潮流の渦のなかで、どのような思想的原則を旗印にしようとしているのかは、この時点ではまだそれほど広く知られていなかったはずである。

註

- (1) Johann Schulze, *Erläuterungen über des Herrn Professor Kants Critik der reinen Vernunft*, Königsberg 1791 (1784) [AETAS KANTIANA 1968], S. 5.
- (2) *Ibid.*
- (3) Vgl. Brief von Kant an M. Herz, nach Mai 1781, in: *Kant's gesammelte Schriften*, hrg. v. der Königlich Preussischen Akademie (以下 *AK. Ausg.* へ省略) Bd. X, Berlin und Leipzig 1922, S. 268 ff. (思想社『カント全集』第十七卷 一九八頁)
- (4) Brief von Hamann an Herder vom 29.4. 1781, in: *Johann Georg Hamann, Briefwechsel*, Bd. 4, hrg. v. A. Henkel, Wiesbaden 1959, S.285. Vgl. auch S.278, 283, u.292 ff.
- (5) Brief von Herder an Hamann vom 31.12. 1781, in: *Johann Gottfried Herder Briefe*, Bd. 4, bearbeitet v. W. DobberG. Arnold, Weimar 1979, S. 201, への書簡を挙げられている Danov とは¹⁴ 1768 年以来イェーナの神学教授であった Ernst Jakob Danovius (1741-1782) のことである。彼は「新教義派 (Neologie)」の信奉者としてイェーナ「啓蒙的神学」の中心人物の一人であるとされた¹⁵。早くからカントの見解に通じており (一七七〇年一月十一日のカント宛て書簡参照) もっとも早く時期に「批判」に注目していった一人である。
- (6) Brief von Herder an Hamann vom Anfang 3. 1782, in: *J. G. Herder Briefe*, *op. cit.*, S.209.
- (7) Johann Schulze, *op. cit.*, S. 6.
- (8) IKant, Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können, in: *AK. Ausg.* Bd. IV, S. 380.
- (9) Vgl. *Rezensionen zur Kantischen Philosophie 1781-87*, hrg. v. Albert Landau, Bebra 1991 (以下 *Landau-Rezensionen* へ省略) S. 3-9. この著作には、カントの著書、論文、見解等について一七八一—一七八七年の間に当時の「学芸報知」「学芸新聞」、批評誌などに公表された、直接、間接の批評・書評のほとんどが収録されており、批判哲学の受容史を知るに便利である。同著に基づいて「一七八四年末までに」「第一批判」「プロレゴメナ」を対象とした批評・書評を年代順に挙げれば、以下の通りである。
【一七八一年】
① 七月一七・二〇日「フランクフルト学芸報知 (Frankfurter gelehrte Anzeigen)」第五七・五八号 (S. 456-61) ……「第一

「一般文芸新聞」における最初期のカント哲学の普及活動

【一般文芸新聞】における最初期のカント哲学の普及活動

批判」の「緒言」と本論の主要な主題の簡明な紹介。

- ②十一月 三日 「最新批評通報 (Neueste Kritische Nachrichten)」第四四号 (S.345-46) ……①と同様の、しかしより簡単な紹介。

【一七八二年】

- ③ 一月一九日 「ゲッチンゲン学芸報知付録 (Zugabe zu den Göttingischen Anzeigen von gelehrten Sachen)」第三号 (S. 40-48) ……いわゆる「ゲッチンゲン書評」。

- ④ 八月二四日 「ゴータ学芸新聞 (Göttaische gelehrte Zeitungen)」第六八号 (S. 560-63) ……「読者に著作の主要主題と区分を知らせるため」の紹介。超越論的感性論までで中断。評者はゴータの宮廷顧問官 H. Ewald。

- ⑤ 「ロシア叢書 (Russische Bibliothek)」第七卷五・六号 (S. 411) ……「第一批判」についての数行の紹介。

【一七八三年】

- ⑥ 七月二二日 「アルトナ学芸メルクル (Altonaischer Gelehrter Mercurius)」第三二号 (S. 243-45) ……最初の『プロレゴメナ』書評。しかし批評は「序文」にのみ、すなわち「ヒュームの問題の解決」と形而上学の可能性だけに言及。

- ⑦ 八月一四日 「アルトナ学芸メルクル」第三三号 (S. 257-58) ……なんの論評も加えずに、『プロレゴメナ』本論の最終部分を抜粋掲載。

- ⑧ 八月三〇日 「最新批評通報」第三五号 (S. 280) ……『プロレゴメナ』についての数行の紹介。ゲッチンゲン書評へのカントの非難に言及。

- ⑨ 秋 「ドイツ百科叢書 (Allgemeine deutsche Bibliothek)」第三七卷補遺から第五二卷まで (S. 838-862) ……「ゲッチンゲン書評」のもとになった(フェーダーによる削除、加筆以前の)、ガルヴェによる「第一批判」書評。

- ⑩ 一〇月二五・二九日 「ゴータ学芸新聞」第八六・八七号 (S. 705-10715-18) ……『プロレゴメナ』の「序文」と本論の主要な主題についての簡単な解説、紹介。

【一七八四年】

⑪ 春

「J・Ch・ロシウスの哲学最新文献使覽」(Übersicht der neuesten Philosophischen Literatur von Johann Christian Lossius)「第一号 (S. 51-70) ……心理学的、宇宙論的、神学的理念の各節に重点を置いた『フロレローマナ』の簡単な解説。「所見」の項では、評者は文章の長さ、専門術語の多用に苦言を呈しつつも、著者の基本的見解に「完全に同意する」ことを表明。

⑫ 十二月

「ドイツ百科叢書」第五九卷二号 (S. 322-56) ……これ以降『ドイツ百科叢書』誌上でカントの著作の多くを書評することになる H.A. Pistorius にみる、評者の見解の対置も含む本格的な『フロレローマナ』書評。

- (10) この経緯については、一七八三年七月十三日のカントに宛てたガルツェの弁明書簡 (In: *M. Ausg.*, Bd. X, S. 328 ff. 理想社『カント全集』第十七卷、二二五-二二三頁) 参照。

- (11) Vgl. *Landau-Rezensionen*, S. 13.

- (12) Frederick C. Beiser は、当時の反カント的な通俗哲学者のうちロッキの経験主義者の陣営に分類できると哲学者として、J.G. Feder, Ch. Garve の他、(一七七五年以降) ゲッチンゲンの哲学教授 Ch. Meiners、『ベルリン月報』の寄稿者でベルリンの医者 Ch. G. Selle (一七八六年以降) マールブルクの哲学教授 D. Tiedemann、カールスルーエの哲学教授 G. Tittel、かつての啓明会の創始者 A. Weishaup、そして『ドイツ百科叢書』編集者 F. Nicolai などを挙げている (F.C. Beiser, *The Fate of Reason, Harvard UP* 1987, p. 169)。彼らは上記の立場から、八〇年代中頃から後半に著作において一斉にカント批判の論陣を張る。ただし、E. エルトマンは彼らの立場を、概して「経験主義的地盤」に立脚した、(ライプニッツ)ヴォルフとロッキとの)「折衷主義」と規定している (Johann Eduard Erdmann, *Die Entwicklung der deutschen Spekulation seit Kant*, Erster Band, Stuttgart 1931, S. 235-250)。

- (13) Vgl. F.C. Beiser, *op. cit.*, p. 170. カントに対する当時の「ロッキ主義者の攻撃」全般およびその主な論点については、同書第六章 (pp. 165-192) が、また「ヴォルフ主義の側からの反撃」については第七章 (pp. 193-225) が簡明である。

- (14) Johann Schulze, *op. cit.*

- (15) カントに批判的なものとしては、例えば『ドイツ百科叢書』誌上での H.A. Pistorius の「フロレローマナ」書評(上記⑩)、『クシヤン学芸論集』(Hessische Beiträge zur Gelehrsamkeit und Kunst)』での D. Tiedemann による「批評」(Über die Natur der Metaphysik)、『それに』(ベルリン月報) 十二月号での Ch. G. Zeller による間接的カント批評、Versuch eines Beweises などが挙げ

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

げられる。後二者は Landau-Rezensionen には収録されていない。

- (16) vgl. Nobert Hinske, Das erste Auftauchen der Kantischen Philosophie im Lehrangebot der Universität Jena, in: N. Hinske/E. Lange/H. Schropfer (Hrsg.), *Der Aufbruch in den Kantianismus*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1995. (以下『*Aufbruch*』と略記)
- (17) *Der Teutsche Merkur*. Weimar 1784. Drittes Vierteljahr. Anzeiger, S. CXXXI.
- (18) 一七八五年一月分だけを対象に、論評された著作のジャンルを挙げれば、以下のごとくである。「神学」「哲学」「美学(Schoene Wissenschaften)」「詩」「戯曲」「小説などを含む」「文芸史」「歴史」「教育学」「言語学」「国家学」「法学」「経済学」「産業行動学(Handlungswissenschaft)」「博物学」「数学」「物理学」「医学(Arzneugelahrheit)」「そして「混成分野(Vermischte Schriften)」。概して、各書四、五本から一〇本ほどの書評が掲載された。
- (19) *Allgemeinheit*とは、当時の用法では、このように入知のすべての領域を遺漏なくカバーする概観というほどの意味であるから、——また A.L.Z. はもとよりさわる「文芸誌」ではなくから——この書評紙を『一般文芸新聞』と呼ぶのは不適切であり、『*學術百科新聞*』とでも呼ぶべきであるが、このことは慣例的訳語に従って置く。
- (20) 一七九五年四月二日にベルトゥーフとの会話についての Böttiger の手記を参照 (zitiert nach: Thomas C. Starnes, *Christoph Martin Wieland, Leben und Werk*, Band 2, Sigmaringen 1987, S. 10)。
- (21) 一七九五年四月二日のベルトゥーフの陳述についての Böttiger の手記を参照 (zitiert nach: *Ibid.*, S.17)。ヴューラントとベルトゥーフは共同出資者として百カロリンギット出資した。
- (22) 一八世紀の最後の三〇年間にドイツで起こった「書籍市場の飛躍的拡大」「読書する大衆の増大」および「出版物の内容上の変化」については、Andreas Wisloff, *Die deutsche Romantik in der öffentlichen Literaturkritik*, Bonn/Berlin 1992, S.15-20 に簡明である。
- (23) Giesela Schwarz, *Literarisches Leben und Sozialstrukturen um 1800*, Frankfurt a.M. 1991, S. 18. 一七六六年——一七九〇年間に創刊された総合学術雑誌や各分野の専門雑誌の伸張は、Joachim Kichner, *Das deutsche Zeitschriftenwesen. Seine Geschichte und seine Probleme*, Teil I, 2. Auflage, Wiesbaden 1958 S. 113-199 に詳しく。
- (24) *Der Teutsche Merkur*, 1784. Drittes Vierteljahr Anzeiger, S. CXXXIII.
- (25) ヘルトゥーフは家庭教師時代にスペイン語を習い覚え、「ドンキ・ホーテ」の翻訳を出して一儲けしてゐた。

- (26) 【ドイツ・メルクル】は創刊時には二千五百部刷っても需要を充たせないほどであり、一七七四年、七五年にも二千部の発行を維持していたが、次第にじり貧になり、八三年には千五百部を切り、八八年には千二百部、その十年後には八百部にまで落ち込んだ。
- (27) W.H. Bruford, *Cultur and Society in classical Weimar 1775-1806*, Cambridge 1962, p. 302. あまり知られていないベルトゥーフの活動については、同書の pp.297-308 を参照。
- (28) 両出資者と編集者シュッツとの間には、千二百部売れた場合には月額三〇〇ターレル、販売部数が百部増える毎に五〇ターレルアップの契約が交わされた。
- (29) Karl Leonhard Reinhold, *Korrespondenz 1773-1788*. Hrsg. v.R. Laut, E. Heller und K.Hiller, Stuttgart-Bad Cannstatt, Wien 1983 (以下、KRと略記する) S. 34 ff.
- (30) そのひとつは、特異な経歴をもち、ウィーンの帝國図書館司書兼貨幣コレクシオン陳列室長であった Valentin Jameray Duval (1695-1775) なる過去の人物に関するフランス語の伝記と著作についての書評であり、もうひとつは、その非正統派の見解のために一七七九年にウィーンの教会法教授を解任された Joseph Valentin Eybel (1741-1805) の「説教集」についての書評である。
- (31) KR, S. 37.
- (32) KR, S. 38, Anm 1. 一七八二年以来のラインホルトの書評、批評活動については、拙稿「K・L・ラインホルト、『哲学』以前——ドイツ・オーストリア啓蒙主義の「断面」(『同志社哲学年報』特別号、一九九五年三月、所収)を参照されたい。
- (33) この有名な事実の詳細については、vgl. Kurt Hiller, Wieland, der Förderer Reinholds, in: *Wieland-Studien*, red. V. Olenbacher u. H. Radspieler, Sigmaringen 1991, S. 81-95.
- (34) 十一月七日のウィーラントからベルトゥーフ宛て書簡 (KR, S. 39, Anm 2.) 参照。
- (35) KR, S. 40 ff.
- (36) *Ibid.*, S. 42.
- (37) *Ibid.*, S. 43 f. (11) に挙げられている哲学者のひとりがかントであることは確実である。この点については一七八五年二月一八日のシントマンのカント宛て書簡 (In: *Ak. Ausg.*, Bd. X, S. 398 f.——理想社『カント全集』第十七巻、二六七頁) 参照。

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

- (38) この書簡を読んで、十二月十一日ヴィーラントは再度ヘルトウーフにこう書き送っている。「イエーナのうるさ屋が、まったく破廉恥な彼の駄文にラインホルトが書いた返答に対して、二ツ折り全紙一枚ぎっしりの反証を送ってきましたが、わたしはこれほど独善、自惚れ、不作法そして教師口調のたわごと満ちた傑作をこれまで読んだことがありません」(KR, S. 40, Anm. 3)。ヘルトウーフは彼は彼で、十二月九日にヴィーラントを評して、シュッツにこう書き送っている。彼は「気の弱い、子供はい自尊心をもった人で、とにかく首尾一貫しない人なのです。確固としたところがまったくなく、今日熱っぽく求めたこと明日はもう求めず、昨日天上に持ち上げたものを今日はもう地獄へ叩き落とすような人なのです。つまり詩人なのです」(KR, Anm 20)。
- (39) *Allgemeine Literatur-Zeitung* (以下、ALZ と略記) Jena 1785⁷ Bd. I, Vorbericht, S. I. — 以下、同紙からの引用はすべて、Zweite Aufgabe に掲げ、Olms Microform System のトランスクリプションによる Landau-Rezensionen に採録されているものとする。は同書の頁の「」内に併記する。
- (40) Vgl. Brief von Schütz an Kant vom 23. 8. 1784, in: *Ak. Awag.*, Bd. X, S. 395 f. (理想社『カント全集』第十七巻、二六一—二六三頁)。
- (41) Vgl. Brief von Schiller an Körner vom 29. 8. 1784, in: *Friedrich Schiller Werke*, Nationalausg., Bd. 24, Weimar 1989, S. 147.
- (42) ALZ, Vorbericht, S. 2.
- (43) *Ibid.*
- (44) Horst Schröpfer, “. . . zum besten der Teutschen Gelehrsankheit und Literatur. . .” — Die “Allgemeine Literatur-Zeitung” im Dienst der Verbreitung der Philosophie Kants, in: *Aufbruch*, S. 87.
- (45) Vgl. Kurt Röttgers, Die Kritik der reinen Vernunft, K.L. Reinhold. — Fallstudie zur Theoriepragmatik in Schulbildungsprozessen, in: *Akten des 4. Internationalen Kant-Kongresses*, vol. II, pt. 2, Berlin 1974, S. 789 f.
- (46) ALZ, Vorbericht, S. 2 f.
- (47) 「ALZ 發送部」からの「ALZ の發送に関する条件についてのお知らせ」(*Ibid.*, S. 4) を参照。

二 『一般文芸新聞』でのカント哲学の普及活動

1 カントの信奉者、Ch・G・シュッツとイエーナ大学でのカント受容

二十年ほど前、「理論の実用論 (Theoriepragmatik)」というユニークな観点からカント学派の形成について論じた K・レットガースは、「シュッツおよび『一般文芸新聞』とカント哲学の結合」は「理論の実用論だけでは説明困難な、思想の政治的結びつき (ideenpolitische Kaitionen)」を示す实例のひとつであると述べている⁽¹⁾。しかも「批判」が公刊当初蒙った一般の評価や、その著者についての当時の世間の風評——「人々は一七七〇年に一度その著者のことを聞いたことはあったが、しかしそれ以後は彼は東プロイセンに隠遁してただ漫然と仕事をしていた」——を思い起せば、「シュッツとカント哲学の結びつきはけっして自明のことのように見え、ほとんど賭けのように見える」と言う⁽²⁾。たしかにそういう側面は否定できない。「批判哲学」とかの批評紙は、少なくとも広範な社会的支持と評価という点ではほとんど勝算と展望を確約されないまま出発しながら、相互「利用」を通してそれぞれが確固たる地位を築き上げるのを効果的に促進し合った。しかし、この結合は少なくともシュッツの側からすれば、「政治的」であると同時に真に学問的な結合であった。そしてかの「賭け」は学問的確信と使命感に満ちた「賭け」であった。そのことは、イエーナ大学での初期のカント受容に関する最近の資料的研究と発掘によつてますます明らかにされつつある。

一七七九年、シュッツが詩学および修辞学の教授としてイエーナに招聘されたとき、彼はもうカントの哲学的見解

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

の精通者であり、その確固たる信奉者であった。学生時代ハレの啓蒙主義的伝統の下、とくに新教義論の主唱者J・S・ゼムラー (Johann Salomo Semler 1725-1791) の薫陶とヴォルフ的独断論に懐疑的―批判的態度を取っていたG・F・マイアー (Georg Friedrich Meier 1718-1777) の影響を受け、ドイツ啓蒙主義の開明的擁護者として自己形成を積んだ彼の関心のひとつは、哲学的人間学の領域での「経験」と「思弁」の結合の問題であった^③。H・シユレーファーによると、ハレの哲學員外教授時代の彼の二つの著書には、すでにカントの前批判期の多くの論文への言及、検討そしてその思想の受容が随所に認められる。その際は、感覺的に経験しうることを合理的に説明せんとする「カントの思想の運びの理にかなった厳密さに繰り返し感激している」^④。また彼が批判哲学の精神のもつとも早い理解者であったことは、一七八二年に―ゲッチンゲン批評が出ただけで、「批判」がまったく孤立していたかに見える時期― 公刊された彼の論文の次の一節に確証される。「最近現われた重要な著作の洞察力鋭い著者が語っているように、現代は批判の時代であり、すべてのことが批判に服さねばならない。一般に入宗教はその入神聖さゆえに、そして入立法はその入尊厳ゆえに批判を免れようとしている。しかし、そのうちそれらは、自らに対するもつともな嫌疑を引き起こし、自らに対する真の尊敬を要求できなくなるであろう。というのも理性は、理性の自由で開かれた吟味に耐えることのできたものだけに偽りなき尊敬を裁可するものだから。(「純粹理性批判におけるカント」)^⑤。

こうした早くからの一貫したカントへの取り組みと傾注ぶりからすれば、シユッツがカント宛ての最初の手紙を「ずっと以前から貴方の諸著作によって享けました教育に対して、またとくに『純粹理性批判』が毎日私にもたらされる精神の滋養に対して真実の心からの感謝を予め開陳」する^⑥と切り出したとしても、それはけっして単なる社交

辞令ではない。そして二回目の手紙で、世間の「批判」評価の「冷淡さ」と「誤解」について、「われわれの時代が貴方と貴方の精神の最も優れたお仕事とにまったく傾かないのではなかるうか」と嘆くとき⁽⁷⁾、シュッツは、いわば「時代」を「批判」の「精神」に相應しい地平にまで引き上げることが自らの学問的使命と感得していると言つても過言ではない。実際彼は、イエーナ大学と『一般文芸新聞』での活動を通してこの使命を十分に果たすことになる。一七八五年の春、彼がイエーナ大学哲学部から新入生向けの学部「案内書」の作成を依頼された折り、あえてカントの名前を挙げたうえ諸学問のカント的構想と区分に基づく草案を起草したこと⁽⁸⁾にも、カント哲学に対する彼の確信の態度が認められる。草案は、学部の古参教授 J・Ch・ヘニングス (Jusutus Christian Hennings 1731—1815) の異論にもかかわらず、大筋シュッツの原案通り承認され、十月にはカント的色彩を帯びた八頁の新入生用研究手引書が千部印刷、配布されたのである⁽⁹⁾。

この出来事は、イエーナでは他の大学に比べると非常に早い時期からカントの新しい哲学への関心、その検討と受容が始まっていたことを示唆している。すでに言及したヘルダーの書簡から確認できるように、神学部のダノヴィウスは「批判」公刊直後から講義中にこれに触れていた。哲学部では、「案内書」に関するヘニングスの異論に対してカント的見解を支持した J・A・H・ウールリッヒ (Johann August Heinrich Ulrich 1746—1813) が、既に一七八四年春頃には「純粹理性批判でカントが解明した点を実際に利用しようとしている最初の人」⁽¹⁰⁾と目されており、八四〇八年の冬学期には、教本『論理学・形而上学教程 (Institutiones logicae et metaphysicae)』に沿った講義を「とくにカントの理説全体を引き合いに出しながら」開始する⁽¹¹⁾。とはいえ、彼はこの時期でさえ——まだ完全な反カント主義者ではなかったとはいえ——「批判」の本当の支持者ではなかった。ライブニッツ—ヴォルフ的立場を抜け出るこ

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

とのなかつた彼の狙いは、自分の構想するネオ・ライプニッツ的形而上学の中にカントの理説を組み入れることであつた⁽⁴⁾。最初のカント主義者による講義は、翌年の冬学期、C・Ch・Eシユミット (Carl Christian Erhard Schmid 1761-1812) によつて、後に有名になる彼のカント手引き書『講義要綱・純粹理性批判 (Critik der reinen Vernunft im Grundrisse zu Vorlesungen nebst einem Wörterbuche zum leichtern Gebrauch der Kantischen Schriften)』(八六年出版) に基づいておこなわれた。さらに一七八六／八七年の冬学期には、かのヘニングスまでが「カントの『純粹理性批判』の諸原則を引き合いに出して」講義を進めることになる。一七八六年の冬にカント理解の難しさをめぐつてイエーナ大学で起こつたといわれる学生同士の「決闘事件」⁽⁵⁾も、こうしたカント哲学への急速な関心の高まりと受容の広がり的一端を表すエピソードである。そしてこれらがみな、ラインホルトのイエーナ着任と評判を呼んだ彼のカント講義開始以前の出来事である点に留意しなければならない⁽⁶⁾。

さてシユッツは、「時代」を批判哲学の地平にまで引き上げるべく、『一般文芸新聞』をカント哲学の普及と宣揚の場として徹底的に活用する。同紙は最初から、いわばカント派の機関誌の様相を呈する。それは、創刊後数年間の「哲学」欄に掲載された書評を仔細に検討すれば明瞭になる。それらの多くは、現代のわれわれの眼から見ればカント哲学のプロパガンダであるといつても過言ではない。批判哲学の新たな思考様式、新たな術語を読書界に広め、この哲学の基本的性向となお生成途上にあつた学問体系を正しく理解させるのに、そして他の哲学的諸潮流に対する優位性を際立たせるのに、同紙は最初の数年間決定的な役割を果たしたのである。それは具体的には以下の四つの形態を通して遂行される。すなわち、第一にカント自身が書評者として諸公刊物の諸主題に対して自らの考えを開陳すること

を通して、第二にいち早くカントの著作・論文の詳細な書評を掲載し、その意義の宣揚に努めることを通して、第三にカントの著作の解説書・注釈書を紙上で大々的に活用することを通して、そして第四に、カント的諸原則の批判的検討を含んでいる諸著作の批評に際して、つねにカント的理説を擁護し、有名な著者たちのカント理解の欠陥を暴きたてることを通して。

以下、同紙創刊後二年間（一七八五—一八六年）に「哲学」欄に掲載された書評を、上記の四つの形態別に検討することによって、上に述べた点を確認していくことにする。

2 カントのヘルダー批評

創刊間もない一七八五年一月六日、『一般文芸新聞』第四号にヘルダーの『人類史の哲学構想』第一部（前年四月公刊）の長大な書評が載る。これは、縦二段組み四頁立ての紙面ほぼ全面を使ってなお収まりきれず、さらに同日付けの第四号「補遺」の半分がこの書評に割かれている。匿名の書評の執筆者はヘルダーのかつての師カントである。

書評はいきなり、著者の方法的態度へのかなり辛辣な口調での注文・批判から始まる。この著作は——「シャープで能弁な我が著者のすでによく知られた独特の性癖」のゆえに——「彼の手になる他の多くの著作の場合と同様、通常の基準にしたがって評定することは不可能であろう」。というのも、著者は「さまざま考えを他人に解りやすく伝えるために、それらを学問と芸術の広範な領野から収集してくるなどということをもつたく行なわなければなりか、それらを（彼の表現を借りれば）△同化▽という一定の法則に従って、著者独特のやり方で自分の特殊な思惟様式へと転換して」しまっているからである¹⁰。そういうわけで「著者が人類史の哲学と言っているものは、通常この

【一般文芸新聞】における最初期のカント哲学の普及活動

語の下に理解されているものとはまったく別物なのであり」、ここでは「概念規定の論理的厳密さ、諸原則の慎重な区別と確証」などはまったく問題にならず、ただ「一気に多くのものを包括するひらめきやアナロギーを見つけ出す円熟した敏感さ」だけが大切にされ、「しかもそのアナロギーの使用に際しては、大胆な想像力が」行使されることになる⁽⁹⁾。

カントはつづいて著作の内容をかなり丁寧で紹介した後、「補遺」を使ってヘルダーの方法に対する同様の批判をより詳細に繰り返す。すなわち「この第一部の理念と究極の目的は、形而上学的探求をまったく回避したうえで、人間の魂の精神的本性およびその持続性と完成への進歩を、物質の自然的形成とのアナロギーから証明せんとするところにある」。それゆえ「書評子はこう言わねばならない。諸々の被造物のかの連続的発生という点については、その規則すなわち人間への接近という規則ともども容認したい気はするが、これを自然のアナロギーから推論的に導くことは理解できない⁽¹⁰⁾」。ヘルダーの有機的・生成論的發展理論についても、カントはこう一蹴する。「有機的な力の単一性は、……観察による自然理論の領野のまったく外部にあって、単に思弁的にすぎない哲学に属しているだけである⁽¹¹⁾」。かくして長い書評はこう結ばれている。「哲学に心を配るといふことの本質は、若木を急かして生い茂らせるというよりも、むしろそれらを切り整えるということにあるのだから」、著者は「自らの企てを完成させるためには」、「暗示によってではなく明確な概念によって、心情的法則によってではなく観察された法則によって」論を進めるべきであり、また思惟を「想像力によってではなく、……その行使に際しては慎重であるべき理性によって」導くべきである⁽¹²⁾。

カントは同書の第二部についても、自ら書評の筆を取っている。前回同様に一七八五年の二七一号(十一月十五日)

全面を費やしているこの書評も、第一部に比べれば著作の内容をより好意的に紹介する傾向を示してはいるもの、依然次のような注文、批判が認められる。「表現を活性化している詩的精神が、ときに著者の哲学の中にまで浸透してはいないか。説明に代わって類義語の使用が、真理に代わってアレゴリーが幅を効かせてはいないか。哲学的言語の領域から詩的言語の領野への移行というより、むしろ双方の領域の限界と領地がまったくずらされてはいないか。」そして「多くの箇所、大胆なメタファーと詩的形象力と神話的暗示との混成物」が事柄の真実を「隠蔽」してはいないか。アナロギーに基づく想像力やメタファーによって編み上げられた理念的構築物はそれがいかに壮大であれ、哲学の名には、ましてや形而上学の名には値しないというカントの批判はたしかに正当であり、ヘルダーの弱点を突いている。しかしこの書評に散見される、かつての弟子に対する揶揄するような冷淡で辛辣な口調には、概念と原則の厳密な規定と関連づけに依拠した学的方法の要求という教導的視点をみだすものが含まれている。したがって、『純粹理性批判』の公衆への普及と受容を妨げている妨害者のひとりであるヘルダーであるという思いがケーニツヒスベルクの哲人に、このような調子の評論を書かせたひとつの要因であるという推測も一定の説得力をもっている。

この書評はヘルダーを大いに怒らせ、ワイマールとイエーナの間に一時緊張を孕んだ関係を作りだした。いわばワイマールの側の総意を受けて、当時ヴィーラントの許にいたラインホルトがこの書評に反論を試みることになる。ワイマールの文人たちの眼には、まだカントはア・プリオリな証明にのみ拘る旧い形而上学の代表者、無味乾燥なヴォルフ主義者のごとく映っていたにちがいない。いずれにせよ、創刊直後のかのヘルダー書評は、カントと『一般文芸新聞』の結合を公然と世に示すものとなり、また同紙がカントの立場に立って同時代の哲学的諸論争に介入する「時の声」となった。なおカントがこの二年間に同紙に寄稿した書評は、これ以外にはG・フーフエラント (Got-

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

tielb Hufeland 1760-1817) —— 創刊以来の同紙の寄稿者、一七八八年以降は同紙の共同編集者、イエーナの法学教授——の『自然法原則試論』に関するものだけにとどまった^例。

3 「哲学の新しい時代」の宣言——シュッツの『道徳形而上学の基礎づけ』書評

カント哲学普及の第二の形態に分類できるのは、八五年の第八〇号(四月七日)に載った『道徳形而上学の基礎づけ』書評と八六年の第一一〇号(五月九日)の『自然科学の形而上学的原理』書評、そして八六年の二五九、二六〇a、二六七号(十月三十日、十月三十一日、十一月八日)の三号にわたって連載された——G・A・ティテル (Gottlob August Tittel 1739-1816) のカント批判書と抱き合わせのかたちを採った——『基礎づけ』書評である。

第一番目のシュッツによる書評の冒頭の文章は、今やあまりにも有名になっている。「数年前公刊されたカント氏の『純粹理性批判』とともに、哲学の新しい時代が始まった。……この深遠な著作はいまなお我が国の最高の頭脳によって研究されておられ、いまなお新しいものと見做されねばならない。この著作が打ち建てようとしている、そして打ち建ててにちがいない革命は、いまようやくその端緒が捉えられたにすぎないのである」^例。すでに度々触れてきた第一「批判」についての当時の評価の实情を斟酌すれば、この宣言は、現代の確定した評価からは想像できぬほど突出した断言のように響いたにちがいない。だがシュッツは確信をもってこう続けている。「『一般文芸新聞』は「追い追い、カント的諸原則とこれによって哲学の領域に引き起こされた諸変化の完璧な概要を伝えていく」つもりである^例。

また、刺激的な宣言を冒頭に配したこの書評は、書評としても極めて異例の体裁を取っている。シュッツは言う。

「この種の著作の場合すぐには評価を与えることはできないので、今回は、評価抜きにただ著作の予告だけにとどめたい」。具体的に言えば、この書評の大部分は『基礎づけ』の「序文」からの引用で埋められており、本論の内容には一行も言及していないのである。「序文」の主要段落（全十三段落のうちの九段落）を——一部シュッツによる短評と注釈を含んでいるもの——約百五十行にわたってそのまま再録しただけのこの文章は、本来書評とは呼べない。この異例の体裁には、いくつかの理由が考えられる。ひとつは、この書評が原著公刊（一七八五年復活祭に出版）直後に書かれているという事情があるだろう。シュッツは、この著の「斬新さをいち早く伝えたい」と思い「この著作の存在を紹介批評するのに、だれにも先を越されまいと一種の嫉妬にも似た気持ちで書評を急いだ」と「告白」している^㉒。しかしそれだけではなからう。ここには、当時の読者のカント理解の程度を勸案したうえで『一般文芸新聞』紙上においてどのように「カント的諸原則」の普及を展開していくかに関するシュッツの長期的計画・配慮が込められているとも言える。彼は『基礎づけ』本論に言及しない理由のひとつを書評の終盤にこう述べている。「この道徳形而上学の基礎づけを正しく評定するためには前以て理解しておかねばならない著者の「哲学の」諸理念を詳述する機会を、シュルツェによるカント純粹理性批判解説書を論評するときまで留保して」^㉓おきたいと思っている。つまり「今回は」「序文」に盛られている批判倫理学の基本視点と根本特徴を提示するにとどめ、その具体的内実は、改めて批判哲学全体の理念と方法と関連づけて説明されねばならない、あるいはそうするほうが効果的だというわけである。ここには、読者に批判哲学をいかに効果的にかつ系統的に理解させていくかについてシュッツの用意周到な配慮が働いているといつてよい。かくして彼は再びこう宣言する。「哲学において開始された新しい出来事Vの遺漏なき完全な歴史を提供すること」^㉔が本紙の任務である。

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

『基礎づけ』本論の紹介、論評は実際はシュルツェの解説書についての書評と関連づけてはおこなわれず、一年半後に別の機会を捕らえて実行されることになった。すなわち、フェーダーの経験論の信奉者でロック主義者、ティテルによる『基礎づけ』批判書、『カント氏の道徳学の改良について』の出版（一七八六年）をうけて、これに反論するという形式で実行されるのである。ティテルはこの小冊子で、幸福主義の立場から、今や「古典的」になった、カント倫理学への批判を定式化している。すなわち「純粹な義務」、義務のための義務は単に空虚であるばかりか、「不可解な」概念である。それは「（不可解にも）神の純粹な愛とされてきたものの代用品にはかならず」、行為のためにはつねに感性的動機を必要とする人間本性とも矛盾する概念である。道徳法則はそれが「まったく空虚で不毛な表現にとどまるべきでなく、若干なりとも適用可能なものであるべきだとすれば、その内容から見れば完全に經驗的なのである」⁸³。結局「カント的な道徳学の改良全体は、新しい定式に限られており」、しかもそれは「空虚な定式」なのである⁸⁴。つまりティテルは、「形式主義」というカント倫理学非難の最初の主唱者のひとりであった⁸⁵。

さて、この三号にわたる書評もその内実は、ティテル批評というよりむしろ『基礎づけ』本論の注解・解説である。二五九号と二六〇a号前半は、『基礎づけ』第一章の各段落の要点を、論述の順序どおりに要約することに費やされている。ティテルの異論については、数ヶ所に付随的に設けられた「註」のなかで取り扱われ、それらが無理解と誤解に基づく「練り言と抗弁」にすぎないと断罪される。二六〇a号後半と二六九号は第二章（ただし途中まで）の内容をかなり圧縮して提示している。こちらでは「註」の部分が大幅に拡大されているものの、ティテルの異論への反論と平行してかなりのスペースが文字通り本論への注釈に充てられている。ここでは、ティテルの異論および書評子のそれへの反論を仔細に検討することはできないし、またその必要もない。その応酬の調子は、書評末尾の次のよう

な文章からでもおおよそ推測できるだろう。「ティテルは最後にこう宣告している。△これが道徳の基礎づけであるというのか? √。だが、親愛なる教会顧問官殿よ、そうではなく△道徳の形而上学の基礎づけ√なのだ! 貴殿にとっては、この場合もまたふたつは同じことなのだ! だから貴殿にとつては、△建築物の理論の基礎づけ√と△建築物の基礎づけ√も同じなのにちがいない」¹⁰⁾。この皮肉は単なる挙げ足取りではない。彼の異論はいつも、具体的行為の経験的動機のみを視野に入れて放たれている。それゆえこれは、徹底した経験主義的幸福論者ティテルが批判倫理学の思考の地平をまったく捉え損なっていることを象徴的に表現しているといえる。したがって「彼はカント氏を、最初の一行から最後の一行まで誤解した」¹¹⁾というシュッツの断定は正当である。

いずれにせよ、前年八〇号の書評と合わせると実に十四面¹²⁾二十四頁分にもなるこの『基礎づけ』書評¹³⁾否、注釈・解説は「熟慮ある読者に、哲学の領域でのカントの尽力に対する新たな注意を喚起させる」¹⁴⁾という目的を十分に果たしことだろう。

4 シュッツによるカント哲学ハンドブック

カント自身の著作の解説的書評と並んで、哲学において始まったばかりの「革命」の意義を広く読書界に浸透させるのに不可欠な貢献をしたのが、当時ようやく出版されつつあった批判哲学の「解説書」の書評であった。この第三の形態に属するものとしては、シュルツェの『解明 (Erläuterungen) 』と C・Ch・E・シュミットの『講義要綱 (Grundrisse zu Vorlesungen) 』についての書評が挙げられる。後者(一七八六年五月十九日付け、第一一九号)が半頁ほどのわずかなスペースしか占めていないのに対して、前者には膨大な紙面が費やされている。すなわち、それは八五年

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

の一六二号（七月十二日）、一六四号（七月十四日）、一七八号（七月二十九日）、一七九号（七月三十日）の五号にわたって合計十八頁を占めている。これはまさに異例中の異例の措置と言わねばならない。以下、その内容を概観してみる。

この書評もまた、実はまったくシュルツェの「解説書」の書評ではない。書評対象となるはずの著作の内容も構成も紹介されず、そこからの引用もほとんどない。シュルツェの名前さえ挙げられるのは稀である。指示される頁数はみな『純粹理性批判』（第一版）のものである。つまり、これはシュルツェ書評に名を借りて、書評者シュツツ自身が読者をカント理論哲学の概観と基本的連関へと導入するために作成した独自のハンドブックなのである。シュルツェの解説書が「第一批判」の無味乾燥な要約にすぎないことを考慮すれば、たしかにこのハンドブックの方がはるかに魅力的である。というのも、これはシュツツによる独自の「味付け」と強調に加えて、カントの諸見解をたえずライプニッツ・ヴォルフ哲学の伝統との対比において、また当時第一級の他の哲学者たちの異なつた見解との対比において際立たせようと努めているからである。

シュツツは書評を開始するにあたって、シュルツェ書の「序文」の冒頭を引用することで一応彼に「敬意」を評する。純粹理性批判は「疑いもなく、思弁的知の領域で生じたもつとも注目すべきかつもつとも重要な刊行物である。この著作は……従来の形而上学の体系すべてが単なる詭弁であり、空虚なかすみでしかないことを有無を言わざぬ確実さで示したばかりか、われわれの理性にとつて完全に満足のいくような信頼に足る形而上学にいつの日かわれわれが到達できる際のその筋道をも示している……」^例。当初この著者は「畏敬に満ちた慎重な沈黙のうち」に迎えられたが、「二年経つてようやく」シュルツェ書の公刊によつて、それが絶えざる研究を必要とする注目すべき著作である

ことが哲学者たちに認識されるに至った。——シユルツェ書への言及はこの半頁程で終わる。以下書評子は、「批判」の「序文」からの長い引用を交えながらこの書の理解を妨げている「著作自身の本性」を解説する。そして、こう続ける。第一批判の体系的な論究と構成、その理解困難さを考慮したうえで、「哲学者たちにこの著作を改めて注目させ、彼らの多くの誤解を取りのぞき、われわれ自身の説明がいくばくかそれに寄与できるようにするために」は、書評は必然的に長大なものならざるをえない。またそのためにも「ただ一つの著だけを論評するより、むしろ三つの著作を同時に論評しなければならない」。三つの著作とは、シユルツェの解説書、『純粹理性批判』、『プロレゴメナ』のことである。またこうした「われわれの狙い」からすれば、書評の論述は「著作の順序に従う」必要はなく、むしろ「カントの体系の主要命題を従来受け入れられてきた主要命題と絶えず比較しながら」かつ「すでに出されている多くの異論を考慮に入れながら」進めるほうがよい。ここに、この書評の性格と意図が明瞭に語られている。

さて書評本論は、興味深いことに、「数学的認識」と「哲学的認識」の区別の説明から始まっている。伝統にしたがつて、前者は「量を対象とし」、後者は「質を対象とする」と漠然と思ひ込んでいる人がいるならば、その人は「結果を原因と考えている」のだ、とカントは言う。それに対してカントは「哲学的認識」を「概念からの理性認識」、「数学的認識」を「概念の構成による理性認識」と特質づけている。この場合「ある概念を構成するとは、その概念に対応する直観をア・プリオリに呈示することである」⁴⁰。周知のごとくこの主題は、『純粹理性批判』では第二部「超越論的方法論」の「第一章、純粹理性の訓練」の冒頭に配されている。だからこの主題が敢えて書評の冒頭に据えらるるにはそれなりの理由がなければならないだろう。それは少なくともシユツツの側にはあった。実はこの区別こそ、先に触れたイエーナ大学哲学部の新入生向け「案内書」の草案に関して親カント派と反カント派教師たちの意見が鋭

く対立した論点のひとつであった。ヘニングスは伝統的見解に従って、このような区別規定を草案に盛ることに反対した⁴⁰。このような事情から推測すると、この区別はシュッツにとつては、伝統的な哲学的思惟の方法およびそれに基づく学問区分とカントのそれとの対比、後者の優位性を典型的に示す実例であると同時に、これを書評冒頭に配したのはイエーナの反カント派教師たちへの意図的な挑戦であったと考えられる。

続いてこの区分に関連づけて、「総合判断」と「分析判断」それぞれの本質と両者の区別が解説される。ここでは、「5+7=12」が総合的命題であるというカントの見解に関してゲッチェンゲン学派の一員で当代の卓越した哲學家であったD・ティーデマン (Dietrich Tiedemann 1748-1803) が『ハッセン學術論集』で提出していた異論に批判が加えられる。これを分析的命題と考えるティーデマンへの批判の要点は、カントの理説に忠実に、この命題を導くには「5」や「7」や「加える」という概念だけでは不可能であり、概念に対応する「直観を必要とする」という点にある。そして、カントは数学的判断が総合的であるというならだれもが「否認不可能な」命題を提出すべきであったというティーデマンの異論に対しては、先の「純粹理性の訓練」章の数学的認識の本質に関する説明を引用して、カントがその点を「多くの箇所で、まったく明瞭に」提示してきたことを示す⁴¹。

一六四号は「われわれの感性の主観的制約」であり、それぞれ「内的直観の形式」、「外的直観の形式」と区別される。「時間」「空間」概念を解説している。ここではカントの感性概念の固有性が、「ライプニッツ・ヴォルフ哲学によって導入された、感性的認識と知性的認識の区別規定」と対比して際立たせられる。伝統に従えば、両者の区別は「単に表象が明瞭であるか、不明瞭であるかの違い」にあり、「感性的表象は事物の混乱した表象であって、しかも事物それ自身に帰属しているものだけを含んでいる」。しかしカントによれば、「感性的表象と知性的表象、あるいは直観

と概念は単に明瞭か不明瞭かの形式に従って区別されているだけでなく、その起源と内容に従って区別されている⁴⁰⁾。続いて、われわれの認識のふたつの源泉、それらの区別と関係が解説される。ところでシュッツはこの号の終盤で極めて興味深い試みをしている。彼はカント的諸概念の「分類」がなお曖昧さを残していることを認めながら、「類」「概念」は表象一般である」というカントの指示を手がかりにして、「カントが純粹理性批判の他の箇所であらう諸概念から」表象の「いっそう完全な」分類を試み、その一覽表を作成している⁴¹⁾。

一七八号では、「判断表」からの「カテゴリーの演繹」が簡単に説明された後、「ア・プリオリな概念がいかにして対象に関係しうるのかという問題」、つまり「純粹理性批判全体のもっとも重要な部分のひとつ」である「超越論的演繹」という課題が提起される。直観の多様がいかにして一個の認識として把握されるに至るかは、第一版に従って「三重の総合」、すなわち「直観における覚知の総合」「構想力における再生の総合」「概念における再認の総合」を通して説かれる。続いて一七九号では、「三重の総合」に関して「若干の表現上の混乱」があることを指摘した後、「純粹理性概念」と「經驗的直観」とが「まったく同種ではない」にもかかわらず「後者がいかにして前者のもとに包摂されるか、したがって現象へのカテゴリーの適用はいかにして可能か⁴²⁾」という問いが、改めて提出される。かくして「図式」の必要性が説かれ、テクストの論述に沿った「図式論」が長々と解説される。一七九号後半から一七九号補遺にかけては、「超越論的弁証論」をカヴァーしている。三つの「超越論的理念」の区分の後、「パラロギスム」の項はかなり詳しく、「アンチノミー」と「神の存在証明批判」は簡単に解説されている。最後の主題に関して、シュッツはカントの論証過程をまったく紹介しないまま、結論だけをこう述べている。「これまでカントの純粹理性批判をまだ読んだことのない読者に、至高の本質の存在を道徳法則の存在に基づける彼の証明根拠を、できるだけ切

り縮めて呈示しておきたい。というのも、この根拠だけでも、人がこの著作の研究に費やしてきた熟考の労力は十二分に報われるからである^{〔6〕}。シュッツは、この「カント的根拠」を呈示するべく、最後に——「究極目的の規定根拠としての最高善の理想」に関する節に基づいて——「道徳的世界」の存在を説き、「思弁的神学」に対する「道徳神学の独自の長所」を説明している。前者は「唯一の完全無欠な理性的、根源的存在者の概念を客観的根拠に基づいて指摘することもせず、その存在をわれわれに確信させることができなかつた」のに対して、「もし、われわれが必然的な世界法則としての道徳的統一という観点に立つて、この必然的な法則にそれにふさわしい効果を与えることのできる原因を、従つてわれわれを拘束する力を与えることのできるような原因を考量するならば、これら一切の法則を自らのうちに包含しているような唯一の最高意志が存在しなければならぬ^{〔7〕}。こうして膨大な書評は「道徳神学」の優位の強調をもつて幕を閉じる。

さて、このシュッツの書評に接して初めてカントに対する眼を開かれたのがラインホルトである。彼はこの書評の終盤の解説のうちに「宗教の根本的真理の道徳的認識根拠^{〔8〕}」を読み取り、いち早くこの思想を我がものとする。それは、長年「狂信」と「無信仰」の両者と闘いながら、いまだ確固とした真の宗教の基礎を確信できずにいたラインホルトにとってひとつの天啓であつた。この書評に触れることを契機に、彼の集中的なカント研究が開始され、それはまもなく「カント哲学についての書簡」に結実する。この事実ひとつを取つてみても、「哲学者たちに改めてこの著作に注目させる」というかのシュッツの「狙い」がいかに効果的な結果を生み出したかは推定できよう。

5 真理の試金石としてのカント

当然のことながら、『一般文芸新聞』「哲学」欄にはカントと直接的関連をもった書評ばかりが載ったわけではない。他の有名な哲学者たちの注目を集めていた著作もタイムリーに書評された。だが、この場合にもまたカントの見解がいつも、真理の試金石のように引き合いに出された。そうしたカントへの参照を通して、陰に陽にカントの優位性が示され、著者たちのカント理解の誤りが糾された。このような形態で間接的にカント哲学の普及に貢献した書評として、一七八五年二〇八号「補遺」(九月二日)でのE・プラットナー(Ernst Platner 1744-1818)の『哲学的箴言集・第一部』改訂第二版の書評、二九五号(十二月十三日)でのウールリッヒの『論理学・形而上学教程』書評、一七八六年一号(一月二日)、七号(一月九日)でのメンデルスゾーンの『暁』書評、そして三六号(二月十一日)でのヤコービの『スピノザ書簡』書評等々が挙げられる。改めて言うまでもなく、前二者は当時定評ある哲学教科書として知られており、後二者は広く読書界の関心を呼んでいた書物である⁹⁰。以下、これらの書評でカントがどのように引き合いに出されているかを概観しておこう。

プラットナー書評は、著者が「この新版ではカントの純粹理性批判のことを精確かつ完全に考慮しているだろう」という「期待」が裏切られたことへの苦情から始まっている。すなわち、プラットナーは「われわれがこの著の印刷完成前に見かけた最初のボーゲンでは、この箴言集の末尾でカントの著作の探求がなされると約束していた」にもかかわらず、刷り上がった新版では「そのことが書かれていた頁が印刷されずに、かの約束は撤回されていた」⁹¹。書評者シュッツは、「序文」でのそのいきさつについての著者の「釈明」に不満を表明しつつも、プラットナーが「自分の講義で、聴講者のなかにいる多くの哲学的才能の持ち主にカントの純粹理性批判を研究するよう激励している」

ことを多とする。というのも「この著作は、その体系がもはや古臭いものになってしまっているような哲学者たちよりもっと若い思想家たちのなかに、かなりの効力を生み出すであろうし、またこの著作が目指している革命は彼らによって効果的に促進され、実現されるであろう」詞から。

続いて書評者は、いずれにせよプラットナーがカントと見解を異にせざるをえないと思っている点を自ら自身の著で明確にすることを改めて要望した後、「今日になってなお、我が国の多くの哲学者」がこの著の出現に対してわざとらしく装っている「怠慢ぶり」は、「信じがたいこと」だと嘆く。「或る街では、一日に六人以上の人がカントの著作を買い求めたが、すぐに同じほどの返品があったということも、不思議ではない」。「だれもが形而上学を研究する必要はない」のだから。「しかし、いやしくも大学で形而上学を講じている者は、形而上学を研究すべきではないのか?」。しかるに——シュッツはこう続けている——「いくつかのドイツの大学では、その言説ぶりからして今日に至るまで自分がカントの純粹理性批判を読んだことがないことを聴講者すべてに告白しているような形而上学の教授が存在する」のは確かなことなのだ。だが「プラットナー氏はそうではない」。彼の「新版」にはカント書と格闘の後が認められる。にもかかわらず、プラットナーが言及している「空間の表象」や、「実体の概念」は、まだカントの理説を十分に理解していない。シュッツはこの点をカントを引用して証示していく。——書評はおおよそこの調子で続いている。最後のほんの付足し程度に、「新版」の内容上の付加点が紹介されるだけである。

ウールリツヒ書評はどうか。これも一見すると、同類の無条件的カント賛美の書評のように見える。いわく「この教科書を目下のところ、この類のものとしては唯一無比なるものとして際立たせているものもとても優れた点は、この教科書があらゆる点で慎重に吟味するに値するカントの体系に絶えず考慮を払っていることにあり、著者がこの体系を

——自分の確信できた部分に限ってであれ——自分自身の体系に織り込もうとする際の鋭敏な手法にある」⁶⁹。さらに書評子は言う。「著者は實際上、カントの主張の大部分を受け入れている」、とくに「カテゴリー表」の「導出」までは、著者はカントの批判「のほとんどの見解」に同意している。ウールリツヒが納得できない点は、その先、すなわち「それ無しには経験の可能性自身が崩壊してしまうような根本命題以外のいかなる総合的根根本命題も、数学の領域以外ではア・プリオリに客観的实在性を有することはない」⁷⁰という点である。ウールリツヒはこの異論をとくに、「因果性の原則」のカント的証明への批判というかたちで展開している。すなわち、ウールリツヒはカントがカテゴリーの妥当性を経験の内部に制限したことに反対し、——特に因果律に焦点を当てて——その拡張を主張しているのである。その際は、「超越論的演繹」を引き合いに出すのではなく、「経験の類推」特に「第二の類推」を典拠に反論を試みている。ここから次のような彼の反論が出てくることになる。「したがって時間は直観の単なる形式ではありえず、客観的に物自体にも帰属させられねばならない」⁷¹。

だが、問題はその先である。書評子は、そのような異論を、著者がカテゴリーの超越論的演繹の部分を検討していないことに発するものとして一応却けながらも、他方「書評子は、宮廷顧問官「ウールリツヒ」の疑念の多くのものうちに、自分自身の疑念を見いだしたと告白せざるをえない」とも述べる。すなわち、「カントの体系が完全な納得を得ようとするならば、もつとも明瞭でなければならぬこの部分」には、なお著者の異論を誘発しかねない「曖昧さ」が多々ある、というわけである。そして書評子は、この「超越論的演繹」の部分を「強力に支配している曖昧さ」の一例をこうパラフレーズする。「カントがカテゴリーの客観的实在性を演繹しているのは、それ無しにはいかなる経験も不可能になるだろうからである。しかるにカントは経験という語のもとに、ときには単なる知覚判断を、

すなわち、ただわたしに対してのみ主観的妥当性を有しているにすぎぬような経験的判断を理解し、またときには経験判断を、すなわち、だれに対しても客観的、したがって普遍的妥当性を有しているような判断を理解している¹⁾。この曖昧さが生み出す混乱と矛盾を、書評者は「第一批判」と『プロレゴメナ』の具体的箇所を引用しながら呈示していく。後にしばしばカント研究者の検討主題にのぼる、先の両判断の区別と関係の問題は、この書評に最初に定式化されたのである。

書評の執筆者は、実はカントの親しい友人にして弟子である、かの『解明』の著者シュルツェであった²⁾。カントがこの書評を無視できなかったことは、翌年の『自然科学の形而上学的原理』の「序文」脚注でこの問題に触れているばかりか、「第一批判」第二版では「超越論的演繹」の項を全面的に書き改めたことから窺える。いずれにせよ、この書評は批判哲学の立場とその成果を支持しながらも、「公平無私」という書評原則に基づいて「批判」第一版の孕んでいた曖昧さや表現上の問題点をも率直に指摘した最初の書評だと言つてよい³⁾。

八六年一月早々の「暁、あるいは神の存在に関する講義」書評も、書評としては異例のものと言わねばならない。異例さは書評の内容にあるのではない。一号と続編の七号途中までは例によって、一部カントの理説の参照を含めて著作の要点が比較的丁寧で紹介・解説されている。書評の常識からして信じがたい作為がなされているのは、最後の半頁である。すなわち、ここには前年十一月末にカントがシュッツに宛てた——「暁」評価に関する——書簡⁴⁾が、一字一句そのまま転載されているのである。カントはこの書簡で、メンデルズゾーンが「われわれの理性使用の主観的制約の呈示に際して、……およそ概念なしにはいかなる対象も現実には存在しないという結論を引き出すまでには到達」していることは前進としつつも、総じてこの著を「われわれの理性の迷妄の傑作」、「独断的形而上学の最後の

遺産」と断定していた⁸⁰。ところでこの転用部分の冒頭には、たしかに次のような一文が挿入されている。すなわち「われわれはこの領野においてずっと以前から有益な発言をする資格のある人の判断をもって、この紹介書評を閉じ、また読者にこれを伝えるにあたってこの人の許しを乞うものである」⁸¹。とはいえ、この作爲的措施は公の学問的批評としてはやはり、異例かつ不当である。創刊以来一年を経て学術世界に確固たる地位を築き始めていたこの書評紙は、ここではカントの諸見解の代弁機関と化している。これは、かの「予告」で唄われた書評の諸原則とは裏腹に、実際には書評がいかに「党派的観点」からなされたかの典型的事例の一つである。

最後にヤコービの『スピノザ書簡』書評のカント言及に簡単に触れておこう。主題が当時の思想界の注目の的であっただけに、書評もまずこの作品の成立事情を解説している。そしてヤコービがこの作品中で呈示している、スピノザの体系についての叙述は「非常に明瞭かつ正確である」ことを認める。しかし、ヤコービがカントの時間・空間規定を「まったくスピノザの精神のうちにある」として、それを有限者と無限者とのスピノザ的連関に関係づけようとするとき、書評者は声を大にしてクレームをつける。「ただひとつの空間だけが存在する、とカントは言う。ただひとつの実体だけが存在する、とスピノザは言う。われわれが多く空間と呼ぶものはみな唯一の包括的な空間の部分にすぎない、とカントは言う。有限なもののみな無限なものとして同じである、とスピノザは言う。この両言明がなぜひとつの精神で語られているといえるのか、この場合なぜカントがスピノザの解明に役立ちうるといえるのか、われわれにはまったく理解できない」⁸²。こうして書評者は、具体的論拠を示しながらヤコービによるスピノザとカントの同一視を排斥し、ヤコービのカント理解の誤りを糾している。

プラットナー、ウールリツヒ、ティードマン、ヤコービ、メンデルスゾーン、これら当代第一級の哲学者、思想家

たちへの論争的批評においても、シュッツは読者に批判哲学の優位を説得力あるかたちで示したのである。

小 括

『純粹理性批判』が公刊当初からたちまちのうちにドイツ思想界を席卷したなどというのは「神話」にすぎず、実情はその逆であったことは、すでに以前から確認されてきたところである。またこの「逆風」を「順風」に転化するのに『一般文芸新聞』が決定的な役割を果たしたことも、広く認められてきた事実¹⁾に属する。しかし、この書評専門紙がいかなる形態でカント批判哲学の普及に貢献したのか、その実態は我が国では必ずしも定かであったとは言いがたい。本稿が試みたのは、この一般的確認事項の細部をいま少し明確に輪郭づけることにすぎない。その細部が顕にしたのは、同紙でのカント哲学の普及活動の実態が、おそらく一般に想定されているのよりはるかに精力的、かつ「強引」であったということである。その強引ともいえる精力的プロパガンダの実態は、一面では当時の批判哲学に対する「逆風」の強さを逆照射していると言える。

本稿が対象とした一七八五―八六年の時期には、批判哲学はその理論的部門も実践的部門も――さすがに第一批判初版公刊当初のような無視ないし黙殺という処遇をうけることはなかったとはいえ――ようやく拡がりつつあった共感と強烈な反感とのせめぎあいの真つ只中²⁾にあった。例えば『一般文芸新聞』以外の「学芸新聞」、學術批評誌での『道徳形而上学の基礎づけ』³⁾評価は、いわば真つ二つに割れていた。三号分の紙面を割きかなり詳しい解説を提供している『ゴータ学芸新聞』こそカントの立場を全面的に支持しているが⁴⁾、そして『哲学界回想』(ライプツィヒ)な

どが比較的好意的な紹介をしているのに対して⁸⁴、『ゲッチェンゲン学芸報知』『チュービンゲン学芸報知』の書評は反カント的立場を鮮明にしている⁸⁵。ピストリウスの手になる『ドイツ百科叢書』でのかなり大部な書評も、いくつかが本質的な点でカント道徳哲学への反論を展開している⁸⁶。ウールリッヒの教本書評に關しても、まったく同様の事態が認められる。すなわちゴータの新聞やライプツィヒの批評誌が、ウールリッヒがカントの理説を取り入れている点を積極的に評価しているのに対して⁸⁷、ゲッチェンゲンやチュービンゲンはウールリッヒのカント批判のみを大いにもてはやしている⁸⁸。ティテルのカント批判書の書評にいたっては、チュービンゲンのみならず『イェーナ学芸新聞』も含めて、フランクフルト、ライプツィヒ、エアフルトの各誌がこぞってティテルのカント批判に軍配を上げているのが実情である⁸⁹。われわれが論評したシュッツのティテル酷評は、こうしたドイツ各地方からの批判に対する唯一の反論であったと言える。つまり、批判哲学はまだゲッチェンゲンやチュービンゲン、そしてベルリンから吹く強烈な「逆風」にさらされていたのである。

だがこうした事情と並んで、『一般文芸新聞』の精力的なカントプロバガンダは、現在もなお妥当する次のような半面の真理を示唆しているとも言える。哲学的理説は偏にその深遠さのゆえに受容され、確固たる地位を得るといふのは半面の真理にすぎず、そのためには深遠な理説といえども効果的な「理論の実利的利用」を必要とする。

註

- (1) K. Rötgers, *op. cit.*, S. 791.
- (2) *Ibid.*.
- (3) Vgl. Horst Schropfer, Christian Gottfried Schütz — Initiator einer wirkungsvollen Verbreitung der Philosophie Kants, in: *Aufbruch*,

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

- S.16.
- Ibid.*, S. 18.
- (4) Ch. G. Schütz, *Über Gotthold Ephraim Lessings Genie und Schriften*, Halle 1782, S. 119 f. (zitiert nach: H. Schöppler, *op. cit.*, S.20).
- (5) *Ak. Ausg.*, Bd. X, S. 392. (前掲訳書「二五六—二五七頁」)。
- (6) *Ibid.*, S. 395. (前掲訳書「二六一頁」)。
- (7) シュッツは「一七八五年九月二十日のカント宛て書簡 (*ibid.*, S.407—410「前掲訳書「二七二—二七六頁」と同年十一月三日のカント宛て書簡 (*ibid.*, S.421—424) での「案内書」に言及してゐる。
- (8) カント書簡集の総註にあたるアカデミー版第十三巻の編集者も「発見できず」、「長年その実在が「疑わしい」とされてきた (*Ak. Ausg.*, Bd. XIII, S. 149) 」、「案内書」は、「近年のイエーナ大学文書庫の資料調査でその実在が確認された。イエーナでの最初期のカント受容を確認するこの「もともと旧ソドギュメント」の意義については、N. Hinske, *Ausblick: Der Jenaeer Frühkantianismus als Forschungsaufgabe*, in: *Aufbruch*, S. 238—240. を参照。」
- (9) 一七八四年五月二一日付けの「イエーナ学芸新聞」第四一号 (S.326) [Landau-Rezensionen, S. 78].
- (10) この「講義告示」および以下に言及するシュッツと、クニンダスの「講義告示」については、N. Hinske, *Das erste Auftrauchen der Kantischen Philosophie im Lehrangebot der Universität Jena*, in: *Aufbruch*, S. 1—14. を参照。また一七八五年四月二一日付けのウールリッヒのカント宛て書簡 (*Ak. Ausg.*, Bd. X, S. 402 f.) も参照。
- (11) 彼が一七八七年以降その講義において「ますますカント批判、攻撃の度合いを強めたことは、一七八七年十月十二日と翌年一月十九日のラインホルトのカント宛て書簡 (*Ak. Ausg.*, Bd. X, S. 497—500 u. S. 523—527. —前掲邦訳書「三二七—三三三頁」三四四—三四九頁) に窺われる。ウールリッヒの立場、特にその主著でのカント批判の要点を知るには、F.C. Beiser, *op. cit.*, pp. 203—210. が簡便である。
- (12) Vgl. Brief von Schütz an Kant von Febr. 1786 (*Ak. Ausg.*, Bd. X, S. 430 f. —前掲邦訳書「二八八—二八九頁」)。
- (13) N. ヒンスケは、「このようなイエーナでの早くからのしかも一定の広がりをもったカント受容の動向、特にかの学部「案内書」の実在を考慮すれば、イエーナでのカント受容がラインホルトの「カント書簡」およびイエーナ着任によって開始され

たとえうのは「伝説」にすぎず、ラインホルトの果たした役割は「少なからず相対化されねばならない」と評している。Vgl. dazu *Aufbruch*, S. 1 f. u. 232 ff.

(15) ALZ, Jena 1785. Bd. 1, Nr. 4, 6. Januar, S. 17. [*Landau-Rezensionen*, S. 109].

(16) *Ibid.* [*Ibid.*].

(17) *Ibid.*, *Beilage* zu Nr. 4, 6. Januar, S. 21. [*Ibid.*, S. 115 f.].

(18) *Ibid.*, S. 22. [*Ibid.*, S. 118].

(19) *Ibid.* [*Ibid.*].

(20) ALZ, Jena 1785. Bd. 4, Nr. 271, 15. November, S. 154. [*Landau-Rezensionen*, S. 235].

(21) Vgl. F.C. Beiser, *op. cit.*, p. 149 u. pp. 349-350, Anm. 68.

(22) ヘルダーは二月十四日「ローマンに」「徹頭徹尾著作の精神からはずれた、悪意と歪曲に満ちたこの形而上学的」批評が「さかに意地悪く、子供っぽく」ものであるかを詠え、カントに對する怒りをぶちまけてゐる (Vgl. *Ak. Ausg.*, Bd. XIII, S. 142 f.).

(23) ラインホルトの反論は、「ドイツ・メルクール編集者への一牧師の書状、ヘルダーの人類史の哲学構想についての或る書評について」という表題で、『ドイツ・メルクール』八五年二月号に掲載された (*Landau-Rezensionen*, S. 119-132)。ALZの側は、すくなくも「ALZ三月分付録」への反論に応酬してゐる (*Ibid.*, S. 235)。

(24) シュッツは、ヘルダーやフリーフェラントの書評の他、さらにプラットナーやエバーハルトの著作の書評をカントに打診していたが、これらはカントの手になるものとしては実現しなかつた。

(25) ALZ, Jena 1785. Bd. 2, Nr. 80, 7. April, S. 21. [*Landau-Rezensionen*, S. 135].

(26) *Ibid.* [*Ibid.*].

(27) *Ibid.*, S. 23. [*Ibid.*, S. 139]. 『道徳形而上学の基礎づけ』は公刊以降、わずか二年たらずのうちに十誌以上の「学術新聞」・批評雑誌に書評されることになるが、たしかに「一般文芸新聞」の書評はそれらのうちでも最初のものである。ちなみに、この時点以降の書評掲載誌を順に挙げれば以下のごとくである。①『ゴータ学芸新聞』第六六・六七・六七補遺号(一七八五年八月一七・二〇日)、②『哲学界回想』第三号(九月)、③『アルトナ学芸メルクール』第三七号(九月一五日)、④『最

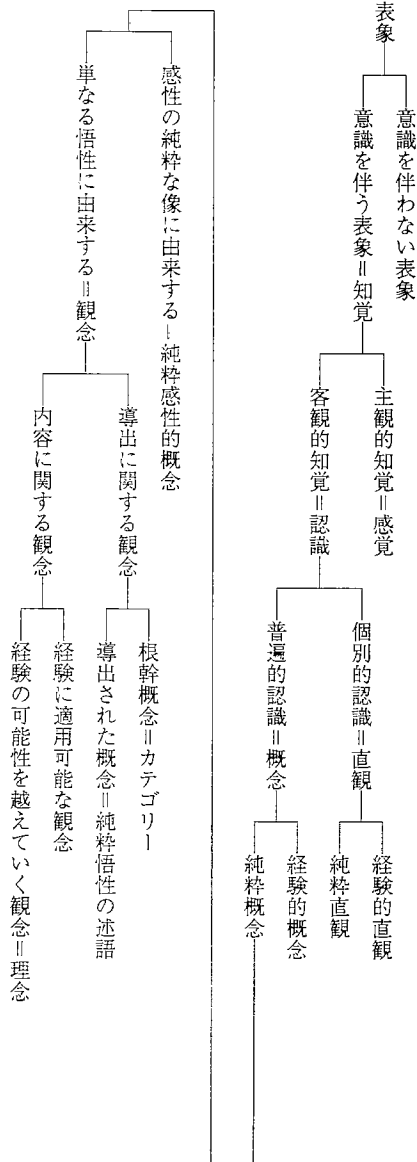
『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

新批評通報』第四〇号(一〇月一日)、⑤『ゲッチンゲン学芸報知』第一七二号(一〇月二九日)、⑥『チュービンゲン学芸報知』第一四号(一七八六年二月一六日)、⑦『最新学術事情批評』第一卷一号(八六年)、⑧『ロシア叢書』第一〇卷一・二・三号(八六年)、⑨『ドイツ百科叢書』第六六卷二号(五月)、⑩『アルトナ学芸メルクール』〔抜粋〕第二三号(六月八日)、⑪『一般文芸新聞』第二五九・二六〇・二六七号(一〇月三〇・三一日、一二月八日)。

- (28) *Ibid.* [Ibid.].
- (29) *Ibid.* [Ibid.].
- (30) Gottlob August Tittel, *Ueber Herrn Kants's Moralphorm*, Frankfurt u. Leipzig 1786[AEITAS KANTIANA 1969], S.6 u.23.
- (31) *Ibid.*, S.92 f.
- (32) *Ibid.*, S.33.
- (33) *Ibid.*, S.35.
- (34) このティネルの反カント的小冊子も結構注目されたようで、八六年五月から十一月までの間に、イエーナ、フランクフルト、チュービンゲン、ライプツィヒ、ハレ、エマフルトの各「学芸新聞」「学芸報知」で取り挙げられている。これはカント道徳哲学への関心の高まりを逆照射してゐるとも言えよう。
- (35) ALZ, Jena 1786. Bd. 4, Nr. 267, 8. November, S.272. [Landau-Rezensionen, S.469].
- (36) *Ibid.* [Ibid.].
- (37) *Ibid.*, S.271. [Ibid., S.468].
- (38) ALZ, Jena 1785. Bd. 3, Nr. 162, 12. Julius, S.41. [Landau-Rezensionen, S.147 f.].
- (39) *Ibid.*, S.42. [Ibid., S.150].
- (40) *Ibid.* [Ibid.].
- (41) Vgl. N. Hinske, *Ausblick : Der Jenaer Frühkantianismus als Forschungsaufgabe*, *op. cit.*, S.234 f.
- (42) ALZ, 1785. Bd. 3, Nr. 162, 12. Julius, S.43 f. [Landau-Rezensionen, S.154 f.].
- (43) ALZ, 1785. Bd. 3, Nr. 164, 14. Julius, S.53 f. [Ibid., S.156].

(44) *Ibid.*, S.55 f. [*ibid.*, S. 161]. ちなみに、その一覽表を挙げれば以下の通りである。



(45) ALZ, 1785. Bd. 3, Nr. 179, 30. Julius, S. 121. [*Ibid.*, S. 166 f.].

(46) ALZ, 1785. Bd. 3, Beylage zu Nr. 179, 30. Julius, S.127. [*Ibid.*, S. 178].

(47) *Ibid.*, S.128. [*Ibid.*, S. 180].

(48) 一七八七年十月十二日のラインホルトのカント宛て書簡 (Ak. Ausg. Bd. X, S. 498. 前掲訳書「三二一九頁」参照)。

(49) Landau-Rezeensionen によれば、プラットナーの教科書はALZ以外にも、チュービンゲン、ゴータなどの学芸新聞、批評誌など四誌で（八五年四月―八月）取り挙げられ、ウールリッヒの教本はさらにニュルンベルク、エアフルト、ゲッチンゲンなどを加え合計九誌に（八五年五月―八六年四月）論評されている。またメンデルスゾーンの『晩』の書評は八六年中だけで十誌を優に越えており、ヤコービの「スピノザ書」も八誌が書評している。

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

『一般文芸新聞』における最初期のカント哲学の普及活動

- (10) ALZ, 1785, Bd. 3, Beilage zu Nr. 208, 2. September, S.265. [Landau-Rezensionen, S. 198 f].
- (11) *Ibid.* [Ibid., S. 199].
- (12) *Ibid.*, S.265 f. [Ibid., S. 200].
- (13) ALZ, 1785, Bd. 4, Nr. 295, 13. December, S.297. [Ibid., S. 243].
- (14) *Ibid.*, S.298. [Ibid., S. 245].
- (15) *Ibid.* [Ibid., S. 246].
- (16) *Ibid.* [Ibid., S. 247].
- (17) Vgl. Ak. Ausg., Bd. X, S. 422.
- (18) C.F. Beiser, (op. cit., pp. 205-208) 43『批判』第二版の「超越論的演繹」の全面改訂の誘因としてこの書評の意義を論じている。
- (19) Ak. Ausg., Bd. X, S. 428 f. (前掲訳書「二八六一―二八七頁」)。
- (20) *Ibid.* Vgl. auch ALZ, 1786, Bd. 1, Nr. 7, 9. Januar, S. 55. [Landau-Rezensionen, S. 261]
- (21) ALZ, *ibid.* [Ibid., S. 260].
- (22) ALZ, 1786, Bd. 1, Nr. 36, 11. Februar, S. 294. [Landau-Rezensionen, S. 274].
- (23) Vgl. *Göthaische gelehrte Zeitungen*, 66., 67. Stück und Beilage zum 67. Stück, 1785, S. 533-36, 537-44 und 450-50. [Landau-Rezensionen, S. 183-96].
- (24) Vgl. *Denkwürdigkeiten aus der philosophischen Welt*, 3. Quartal, 1785, S.433-67. [Ibid., S. 203-18].
- (25) Vgl. *Göthingische Anzeigen von gelehrten Sachen*, 172. Stück, 1786, S. 1739-44. [Ibid., S. 229-33].; *Tübingsche gelehrte Anzeigen*, 14. Stück, 1786, S.105-12. [Ibid., S.277-83].
- (26) Vgl. *Allgemeine deutsche Bibliothek*, 66. Bd. 2. Stück, 1786, S.447-63. [Ibid., S. 354-67]. この書評のピストリウスのカント批評の重要な論点の示唆を、F.C. Beiser, op. cit., pp.190-92を教示的に行っている。
- (27) Vgl. *Göthaische gelehrte Zeitungen*, 46. Stück, 1785, S.369-70. [Ibid., S. 144-45].; *Denkwürdigkeiten aus der philosophischen*

- Welt, 4. Quartal, 1785. S.680-81. [*Ibid.*, S.240].
- ㊦ Vgl. Göttingische Anzeigen von gelehrten Sachen, 44. Stück, 1786. S. 436-38. [*Ibid.*, S. 298-99]; *Tübingsische gelehrte Anzeigen*, 33. Stück, 1786. S. 258-64. [*Ibid.*, S.309-13].
- ㊦ Vgl. *Jenaische gelehrte Zeitungen*, 38. Stück, 1786. S. 298-300. [*Ibid.*, S. 378-80]; *Frankfurter gelehrte Anzeigen*, Nr. XLIII, 1786. S. 337-40. [*Ibid.*, S. 398-99]; *Tübingsische gelehrte Anzeigen*, 45. Stück, 1786. S. 358-59. [*Ibid.*, S.403]; *Neue Leipziger Gelehrte Zeitungen*, 81. Stück, 1786. S. 1293-96. [*Ibid.*, S. 407-409]; *Erfurtische gelehrte Zeitung*, 30. Stück, 1786. S. 258-64. [*Ibid.*, S. 309-13].